



角館町出身の山谷初男さんは戦友のひとりとして登場。一人暮らしでも力強く生きる老人を熱演する。



仙台では寝たきりになった戦友と、かいかいしく世話をする妻に会う。



診察室での医師と主人公のやり取りは、その場で医師からアドバイスを受けながら撮影された。



花火師の佐々木秀幸さんが花火の着火装置を使って戦争シーンを作り出した。



出演者と監督、薬剤師のあいだで打ち合わせ。薬を処方するだけでなく、処方せんの確認や患者さんの心のケアを行うのも薬剤師の役割。

ABS秋田放送
坂本梅子詩集への旅 「たそがれ」
放映日 / 10月26日(予定)
時間 / 14:00 ~ 14:55
脚本・演出 / 那珂 静男
出演 / たかはししげき、山谷初男ほか

「生」の証を見つめる旅

重みとその感性に感銘した中仙町出身の詩人・坂本梅子さんの詩と絡ませたストーリー展開が浮かび上がった。

鎌倉に住む友禅作家はある日、絵筆を持つ自分の手のかすかなふるえに気がつく。老化現象のひとつとして現れた手のふるえと、不思議と心に来来する戦争の記憶。思い悩む主人公だったが、ある日、薬局の待合室で坂本梅子の詩集を偶然手にする。やがて、詩集に描かれた田沢湖を目指し、仙台や盛岡に住むかつての戦友と再会する旅に出る…。

「老い」の季節を迎えた戦友たちと出会い、「戦争」という過去と向き合うことで次第に芽吹いていく、「生」への憧れ。田沢湖の春のたそがれや子供の影踏み遊びを謳う坂本の詩と、すべてを包み込むように荘厳に流れゆくハトムセ丁のメロデーが心に響く。人生のたそがれに春のたそがれの情景が自然に重なり合っていく。そして、手のふるえが意味するものとは何なのか。

春の「たそがれ」に願いを込めて

ドラマは四月から制作に入り、本荘市の友禅工房や秋田市の民家、病院、薬局などで撮影を行った。七月末には協和町の砂採取場で戦争シーンを撮影してクランクアップ。兵士が塹壕に飛び込むシーンでは花火師が爆発物を仕掛け、日本兵の服や備品は本物を取り寄せるなど、限られた予算のなかで高レベルな撮影が実現した。初めてのことはかりの現場にあって、秋田でできることを示したい」という那珂監督のオリジナリティと映像への熱い思いが数多くのスタッフと出演者を動かした。

「戦争体験、高齢者の介護、一人暮らし、病氣…。「老い」と「死」にまつわる問題を見つめながら、主人公は「永遠という時の走者」として生と死の意味を悟る。それは、春のたそがれの情景に漂う希望でもありません。物悲しい秋のたそがれと違って、かすかに霞がかった春のたそがれは、いとも美しく、穏やかに「生」を映し出す。



大空が火



友禪作家を演じるのは、仙台や盛岡などでも活躍する舞台俳優のたかほしけきさん(横手市)。



炎天下、協和町の砂採取場で撮影された戦争シーン。火薬と土煙のなか戦争さながらの場面が出来上がった。



那珂静男監督

「死」と向き合う

「たそがれのオカリナ」

暮れなずむ春のたそがれほど

「こころにしみるものはない

風も夕なぎて

草も花も木もしずもり…



人生のたそがれを迎えた手描き友禪作家は、詩人・坂本梅子の詩集にちりばめられた言葉と、描き出された情景に導かれるように旅に出る。それは、これまで押し殺していた自分自身の過去を見つめ、おぞましい戦争の記憶と向き合う旅でもあった。

テーマは「命をはぐくむ」

ドラマ・坂本梅子詩集への旅「たそがれ」は、戦争体験、介護、痴ほうなど高齢者を取り巻く重い課題の根底に流れる「命」がテーマ。

「生」を見つめるには、皮肉にもその反対側にある「死」と向き合わなければならない。生きる「こと」、死ぬ「こと」。これら永遠に続く自然の営みのなかで、人は「命をはぐくむ」という使命のもとに生涯を生きる。「命をはぐくむ」なかで、人にはさまざまな出来事が起こります。病氣、介護、精神的な疾患、病院、薬…。そんな時、人を手助けする情報発信基地として薬局を利用していただきたい。気軽に相談してもらいたい。そんな秋田県薬剤師会の思いを写し取るように、「命をはぐくむ」をメインテーマとしたドラマ作りが始まりました。

「生」と「死」を見つめる旅

脚本・演出は秋田市の映像作家・那珂静男さん。秋田県薬剤師会のテレビCM「処方せんがあるから」で二年前にギャラクシー賞を受賞。その後、薬剤師会専務理事の鳥海良寛さんとのあいだで構想が練られ、言葉の

